

No.46

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

発行 2010.3.31

編集 佐賀県立九州陶磁文化館

代表者 稲富初夫

〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町伊賀乙3100-1

TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324

http://www.pref.saga.lg.jp/at-contents/kanko_bunka/k_shisetsu/kyoto/

E-mail:kyuto@pref.saga.lg.jp



いろえかじつもんさら 色絵果実文皿ほか (洋食器セット)

館蔵資料 (20-7646~7660)

有田・田代家贈

肥前・有田・肥磯山信甫

1860~70年代

(皿) 口 径: 23.7cm

高 さ: 3.1cm

高台径: 14.4cm

洋食器のセット、いわゆるディナーセットです。色絵で葡萄、柘榴、栗、サヤエンドウなどのくだものや野菜を描いた文様で彩られています。23cm程の肉皿を中心にスープ皿、小皿、小鉢、楕円形の大皿（プラター）などに、チュリーン（スープなどを入れる蓋付の鍋状の器）やソースなどを入れるグレイビーポートなども描っています。それにポット、砂糖入れ、カップ・ソーサーというティーセットも付いています。欠失した分があるにしても15種、41点はたいへん豪華です。底面には幕末・明治に活躍した有田の貿易商・田代家の銘である「肥磯山信甫造」が入っており、有田で洋食器が作られた例としては早い時期になるものと考えられ、貴重な作品といえます。

開館30周年記念特別企画展のお知らせ

「珠玉の九州陶磁」展

○趣旨

佐賀県立九州陶磁文化館は、昭和55年11月1日、九州各地の陶磁を対象とした博物館として設立され、平成22年に30周年を迎えます。

この間、1万点に上る柴田夫妻コレクションの肥前磁器をはじめ、豊富で多彩な九州陶磁を収集し、また研究面でも多くのなぞを解明してきました。そうした研究成果に基づき、平成8年の世界・姫の博覧会における「文明とやきもの」展や開館10周年記念の「海を渡った肥前のやきもの」展、開館20周年と日蘭交流400周年を記念した「古伊万里の道」展など、国内外を見据えた企画展を開催しました。

本展覧会は、江戸時代に飛躍的な発展を遂げ、この時代にもっともやきもの生産が盛んであった唐津、上野、高取、小代、八代、薩摩、壺屋などの九州の陶器と日本初の磁器として世界に輸出された伊万里をはじ

め、鍋島、平戸などの磁器からなる多彩な九州陶磁の魅力を余すところなく伝えようとするものです。

開館30周年という節目の年にあたり、あらためて当館設立の趣意に基づく九州の陶磁器の源流と展開を、九州各県はもとより、全国に所蔵される名品によって紹介し、陶磁文化・芸術の普及と発展に寄与することを目的とするものです。

○主催及び会場 佐賀県立九州陶磁文化館

第1・第2・第3展示室

○会期 平成22年10月2日(土)～11月14日(日)
44日間(会期中無休)

○出品点数 200件(予定)

○観覧料 有料

○展示解説 10月7日(土)より毎週土曜日
14:00～15:00

○記念講演 10月23日(日) 13:30～15:00(予定)



灰釉茶碗（奥高麗）銘瑞雲
肥前・唐津 1580～1610年代



染付鶴図三足大皿 重要文化財
肥前・鍋島藩窯 1690～1710年代



染付高蒔絵牡丹唐獅子文大壺・広口大瓶
肥前・有田 1700～40年代



藁灰飴釉掛分盃茶碗
筑前・高取 1610～20年代

新収蔵品展 I 寄贈記念 有田磁器の世界

- 会期 平成22年5月14日(金)～6月6日(日)
- 内容 平成21年度に柴田祐子氏より寄贈された江戸時代の有田磁器を展示します。
- 展示数 254件 719点(予定)
- 会場 第2展示室

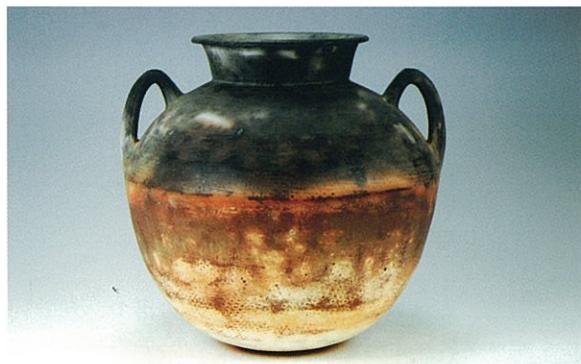


青磁染付雲龍文輪花皿 肥前・有田 1820~60年代

テーマ展 オランダ絵伊万里

- 会期 平成22年11月20日(土)～12月2日(木)
- 内容 オランダ人や西洋風景を描いた江戸時代の有田磁器などを展示します。
- 展示数 40件 50点(予定)
- 会場 第1展示室

- 会期 平成22年6月11日(金)～7月4日(日)
- 内容 平成21年度に館蔵となった古陶磁、中里逢庵氏や藤井朱明氏などの作品を展示します。
- 展示数 150件 200点(予定)
- 会場 第2展示室



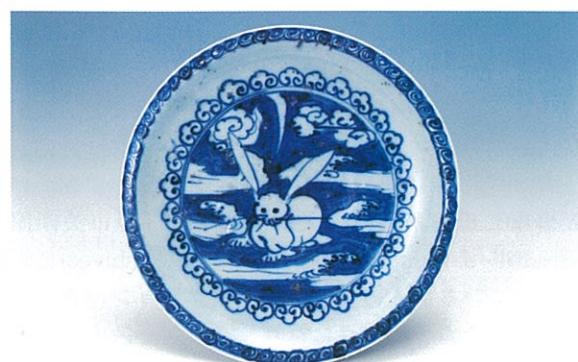
叩き唐津三島耳付壺 中里逢庵 昭和57年 第14回日展



色絵蘭人文皿 肥前・有田 1790~1820年代

テーマ展 新春展 千支 兎の文様

- 会期 平成22年12月17日(金)～平成23年1月16日(日)
- 内容 平成23年の干支である兎の意匠をもつ陶磁器を選び展示します。
- 展示数 50件 60点(予定)
- 会場 第1展示室



染付波兎雲文皿 肥前・有田 1620~40年代

テーマ展 金彩、銀彩の世界

- 会期 平成23年2月2日(水)～2月20日(日)
- 内容 多彩な肥前磁器の中から金、銀を用いた華やかできらびやかな色絵磁器などを紹介・展示します。
- 展示数 50件 60点(予定)
- 会場 第1展示室



色絵折枝果木文皿 肥前・有田 1655~70年代

ヨーロッパの肥前陶磁器を訪ねて6 英国の肥前磁器コレクション その5 Hizen Porcelain Collections in the UK ディラム・パーク(Dyrham Park)

ロンドンからM4を西に2時間、18番出口で下りA46をバース(Bath)方面に南下するとすぐに右にDyrham Parkの標識がある。門に入り暫く丘を下ると、17世紀後半の典型的なバロック・スタイルのディラム・パークが見える。この家はウィリアム・ブラスウェイト(William Blathwayt c1649-1717)が1686年にこの跡取り娘のメアリー・ワインター(Mary Wynter 1651-1691)と結婚し、メアリーの死後その土地にあったチューダー朝の家を1692年から1704年の間に建て直したものである。

ウィリアムはロンドンの裕福な家の出で、父と同じくオックスフォード大から法律家の道へ進んだが、1668年外務省に入り、当時ロンドンで有力な法律家であった母方の叔父トマス・ポウヴィ(Thomas Povey c1618-1700)の推挙でオランダのハーグ(The Hague)の英國大使館に赴任、1670年代初めにロンドンに戻ると、有能さを認められて北アメリカの英國植民地担当となり、1685年以降、貿易と農園を統括、アメリカ、カリブ海での貿易、及び奴隸貿易で財をなした。

その間に軍事省長官の職も手に入れ、オランダ語の得意なウィリアムは、メアリーと共に英國の王位についたオランダ出身のウィリアムIII世にも重用された。

1693年から1710年までバース地区のホイッグ(Whig)党の国会議員となつたウィリアムは、1710年に政界を引退するまでロンドンにおいて実際にディラムに住むことはなかったが、家には強い関心を寄せ、建設に携わる建築家と多くの手紙を交わしている。東洋とオランダの影響は家具調度に明らかで、オランダ東インド会社による輸入品と思われる東洋の衝立てや卓、日本の漆塗りの、あるいは英國で似せて作られた家具は、インド製の織物と共に東洋的な雰囲気を醸し出し、さらに金皮革の壁紙、デルフト陶器、多数のオランダ17世紀の絵画がこの家を飾っている。

ウィリアムは1717年にディラムで没し、息子は二人とも国政に関与せず、子孫は大地主としてディラム・パークに住み続けた。家は何度か改造が行われ、家具調度は1765、1956年の売り立てでかなり散逸したが、それでも現在ディラム・パークに残るものでブラスウェイトの好みはよく窺われ、17世紀後半の英國貴族のというより、オランダの富裕な家の雰囲気を残している。1956年に家と家財は国が、土地はNational Land Fundが管理するところとなつた

TANAKA, Shigeko

田 中 恵 子

- 日本アジア協会副会長
- 東洋陶磁学会（日本）会員
- The Oriental Ceramic Society(London)会員

が、ナショナル・トラスト (National Trust) に維持費と共に移管され、1976年には残りの土地もブラスウェイト家から買い取られ、館と庭は一般公開されている。

蔵品目録に関しては、家の建築が大体完成し、新しい女中頭(house keeper)の任命に先立つ1703年に最初の蔵品目録(Inventory)が作られ、その後1710, 1742, 1839, 1871年にも作られて、この家に関する他の文書と共に現在、グロスター県記録保管所(Gloucestershire County Record Office)に保管されているとのことである。ウィリアムがディラム・パークに引退した年の1710年の記録を見る機会を得たが、当時東洋陶磁を飾るのが流行していたにも拘らず、たまにデルフトの記載があるだけでどの部屋も家具、ベッド、絵画、カーテンなどばかりであるが、The Lodgeという恐らく女中頭のための別棟の蔵品目録の中にChinaの項目があり、計149点中、69点が染付を意味するblew(ママ)&whiteとあり、その下にDelf (ママ)としてデルフトが東洋陶磁と区別され、13種60個強、記載されている。当時、大きな館の陶磁器は女中頭が管理責任者であり、東洋陶磁の記載が館になく別棟にあることは、ウィリアムの不在を示すのかかもしれない。

現在、一階の廊下の大きな飾棚の中に染付を主とする東洋陶磁が所狭しと並べられている。主に17, 18世紀の中国の輸出向け染付の小碗、皿などで、その中に高台内にいわゆるヨハネウム・マーク(Johanneum Mark)と呼ばれる、「N:数字、その下に染付はwwのような波型の記号」が彫り込まれ、黒い色素が塗り込まれているものが数点あることを、1996年の夏にガラス戸越しに発見して家の管理責任者に報告した。このマークは、ザクセン(Sachsen)選帝侯であり、ポーランド(Poland)王でもあったアウグスト強力王(Augustus the Strong)と称されたアウグストII世(1680-1733)が、日本の磁器に魅せられ、ドレスデン(Dresden)に東洋陶磁の一大コレクションを作り、1721年に蔵品目録を作成する際に裏面に彫り込んだマークである。

2009年3月19日、九州陶磁文化館特別学芸顧問の大橋康二氏の来英の機会に、ブリストル市美術館(Bristol's Museums, Galleries & Archives)に寄託されている個人の肥前磁器コレクションの調査の前にディラム・パークに寄り、このケース内の染付の調査をしたところ、有田の染付の皿3, チョコレート・カップ1が含まれ、その皿の1枚とチョコレ

ト・カップにヨハネウム・マークがあり、中国の染付の皿2枚と、チョコレート・カップ1個にもヨハネウム・マークがあることがわかった。

この5点がこの館に入るのは、少なくとも1721年のアウグスト強力王の蔵品目録完成後であり、1733年の王の死後と考えられるが、ウィリアムの子孫は国政に関与せず、国家間のギフトとしてこの家に入ったとは思えない。英国内で色絵にヨハネウム・マークのあるものは、大英博物館(British Museum)、V&A(Victoria & Albert Museum)、アシュモレアン

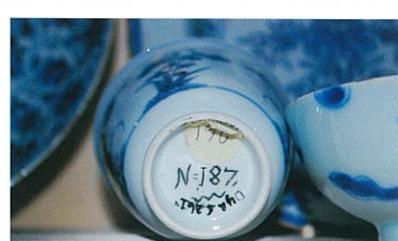
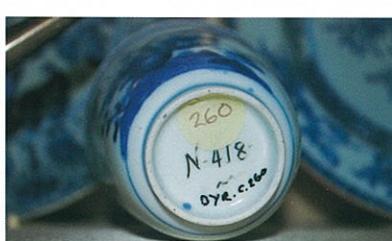
美術館(Ashmolean Museum)などで見られるが、有田の染付にヨハネウム・マークのあるものは、管見の限りV&Aにある皿以外には知らない。この5点を除くこのキャビネット内の染付と別の部屋にある有田の芙蓉手の大皿は年代的に1710年の蔵品目録のThe Lodgeの項に記載された染付である可能性があるが、例えば11:blew(ママ) & white Chocolate Cupsという大まかな記載で、個々に確認をすることができるのが残念である。



色絵岩柳文小皿
有田 1660~70年代
口径13.8cm、高さ3.1cm、底径8.0cm

染付牡丹蝶鹿文大皿（芙蓉手）
有田 1670~90年代
口径54.6cm、高さ11.0cm

(左)染付樹木唐人文輪花小皿
有田 1670~90年代
口径14.5cm、高さ3.4cm、底径8.2cm
(右)染付釣人橋人物文輪花小皿
有田 1670~90年代
口径13.8cm、高さ2.6cm、底径8.9cm
[N : 383
VVV]



(左)染付褐釉草花水禽文小皿
中国 17世紀末~18世紀初
口径11.6cm、高さ2.0cm、底径6.7cm
[N : 604
VVV]

染付梅竹鳥文碗（チョコレートカップ）
有田 1670~90年代
口径8.2cm、高さ8.2cm、底径3.7cm
[N : 418
VVV]

染付梅竹鳥文碗（チョコレートカップ）
中国 18世紀前半
口径8.2cm、高さ7.3cm、底径3.9cm
[N : 187
VVV]

(右)染付褐釉楼閣山水人物小皿 中国
17世紀末~18世紀初
口径11.2cm、高さ2.3cm、底径6.7cm
[N : 461
VVV]

平成21年度常設特別展の報告

開館30周年イベント「私の選んだ九陶のやきもの」

○主 催 佐賀県立九州陶磁文化館

○会 場 佐賀県立九州陶磁文化館

第1・第2・第3展示室

○会 期 平成21年9月18日(金)～10月25日(日)

35日間

○出品点数 220件294点

○展示内容

九州陶磁文化館の開館30周年のイベントとして、約30年間に収集した所蔵品の中から代表的なものを選び、一堂に紹介しました。

一般の方々からの公募や県内外の人間国宝などの著名人による選定により、江戸時代の九州陶磁だけでな

く、中国陶磁や近・現代の陶芸作家の作品など幅広い作品を展示しました。

○展示構成

- | | |
|----------------|-----|
| 1. 私が選んだベスト30 | 30件 |
| 2. 佐賀のやきもの | 89件 |
| 3. 九州各地などのやきもの | 49件 |
| 4. 海外のやきもの | 19件 |
| 5. 近・現代のやきもの | 33件 |

○関連行事

記念茶会 9月26日(土) 13:00～15:30

展示解説 9月26日(土)、10月10日(土)



展示状況



展示解説の様子

第105回九州山口陶磁展

○会 期 平成21年4月29日(水)～5月10日(日)

12日間

明治29年に「有田陶磁品評会」として発足した本展覧会は、九州山口各県の優れた陶磁器作品を一堂に展示し伝統的工芸の継承と陶磁器産業の発展を期することを目的として今回第106回目を迎きました。

今回の展覧会では、第1位の石原祥嗣氏の「黒地金彩直弧文陶箱」をはじめ、102点の入賞・入選作品が展示されました。



第1位 文部科学大臣賞 石原祥嗣
黒地金彩直弧文陶箱

寄贈記念 青木龍山回顧展

○会 期 平成21年6月19日(金)～7月20日(月)

28日間

青木龍山氏は日本芸術院会員で、文化勲章を受章されるなど、日本陶芸界に多大な足跡を残しましたが、平成20年に惜しくも死去されました。龍山氏の創造の軌跡を一堂に紹介する本展では、ご子息・清高氏より寄贈された61点を含む105件113点の代表作を展示しました。



展示状況

テーマ展 夏休み特別企画 てのひらのやきものーかわいい小皿・豆皿ー

○会期 平成21年7月18日(水)～8月23日(日)
33日間

小皿や豆皿と呼ばれる小さなお皿は、現代でも取分け皿などとして日頃よく目にします。魚や貝といった海の生き物や、蝶や桜、松といった動植物など様々な形や文様のものがあります。いろいろな文様、意匠が施された江戸時代の小皿114件198点を展示しました。



展示状況

新収蔵品展 I

○会期 平成21年7月25日(土)～8月16日(日)
20日間

平成20年度に寄贈により新たに館蔵となった古唐津の鉄釉甕、古伊万里の染付葉文小皿など、陶磁器162件202点を展示しました。



展示状況

新収蔵品展 II 「肥碟山信甫と明治の有田」

○会期 平成21年8月21日(金)～9月13日(日)
21日間

平成20年度に有田の田代家から寄贈された陶磁器を紹介しました。

幕末から明治期にかけて、有田の陶器商・田代紋左衛門は「肥碟山信甫」の銘で、主に輸出向けの陶磁器を多く製造・販売しました。本展では田代紋左衛門が手がけた洋食器や薄手の食器、また田代家に伝わった明治・大正期の有田や三川内などの製品192件432点を展示しました。



展示状況

新春展 千支 寅の文様展

○会期 平成21年12月11日(金)～
平成22年1月11日(月)
25日間

やきものには、人物、植物、動物、風景などいろいろなものが描かれています。特に動物や植物は様々な種類が描かれており、干支にちなんだ動物達も数多く描かれています。

展覧会では、今年の干支である寅の意匠の陶磁器34件56点を展示しました。



展示状況

テーマ展 やきものの近代化 －西欧技術の導入と有田磁器展開－

○会期 平成22年2月2日(火)～2月21日(日)
25日間

有田磁器では、明治初期に洋絵具や石膏型が使用されはじめると、西欧の窯業技術が導入され、近代化の波が押し寄せます。和食器など従来のものに加えて、本格的な洋食器が作られ、型紙摺や銅版転写の染付磁器なども多く作られました。本展では有田磁器を中心とした窯業の近代化に関する作品46件114点を展示しました。



展示状況

シリーズ

やきものの技法(41)

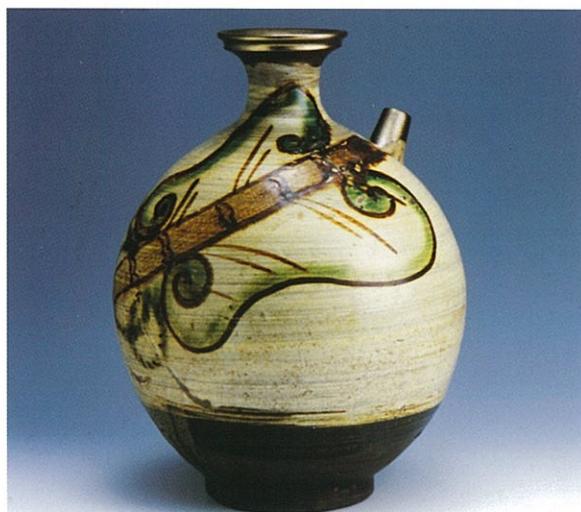
てつ 鉄 絵 緑 彩

鉄絵緑彩は、江戸時代の唐津焼の代表的な技法のひとつで、鉄絵具で文様を描きし、銅緑釉で彩色するものです。かつては「二彩手」と呼ばれた技法で、一般には「二彩唐津」などという方がなじみがあるかもしれません。しかし、二彩唐津は、鉄釉に緑釉の流し掛けや掛け分けなど幅広く含むため、近年では鉄絵と銅緑釉で文様を表す技法を特にこう呼ぶようになりました。

唐津焼初期の慶長の頃に盛んに行われた「絵唐津」は、素地に直接、鉄絵を描いたのですが、この鉄絵緑彩は、まず素地に白化粧を施し、その上に鉄絵具で線描きを行い、銅緑釉で彩色し、透明釉を掛けて焼き上げる。肥前で磁器が焼かれはじめた1610年代頃から見られ、17世紀の第2四半期から第3四半期頃が最盛期で、第4四半期以降になると大きく減少します。製品は大皿、大鉢、甕、壺、瓶などで、松絵を描いた甕などは18世紀以降も作られます。鉄絵緑彩など二彩唐津を焼いたのは、武雄領内の窯が中心で、川古窯ノ谷下窯跡、釜ノ頭窯跡、白木原1・2号窯跡、大谷窯跡、焼ヶ峰窯跡などが挙げられます。

写真の製品は雲助徳利と呼ばれる注口の付いた壺形の容器で、水や酒などの液体物の運搬、保存に用いられたものです。注口が付いているので、他の容器に小分けするのにも便利だったのでしょう。口部から胴下部まで白化粧土を塗り、そこに大きく軍配文を鉄絵で輪郭線などを描き、緑彩を施しています。

(宇治 章)



鉄絵緑彩軍配文雲助徳利
肥前・唐津 1660~90年代

シリーズ

やきものにみる文様(41)

とら 虎 文

虎は大陸から離れた島国である日本には虎は生息していませんが、地上に住む動物達の頂点に立つ最強の存在でとされ、アジアを中心としたユーラシア大陸の各地で様々な種類の虎を見ることができます。これらの虎は勇猛で威厳があることや、額の縞模様が「王」の字に見えることから「獣の王・野獸の王」とも呼ばれています。また、一二支の中の3番目であり、「四神」の中では西方の守護神「白虎」として秋を象徴する存在とされています。

このようなことから、虎が存在する中国や朝鮮半島、東南アジアなどでは、人食い虎として恐れられながらも魔除けや力の象徴としていろいろなものに描かれ、民話や神話の中にも数多く登場し、いろいろなことわざや慣用句でも多く登場します。このため日本ではあまり身近な存在ではない虎ですが、馴染み深い動物といえるでしょう。その一つの例として、「虎の子」という言葉がありますが、これは虎が自分の子を非常に大事にすることから、大事な物・貴重な物をたとえて言います。これ以外にも「虎穴に入らずんば虎子を得ず」や「虎視眈々」、「虎の威を借る狐」などはよくご存知の言葉ではないでしょうか。

このく染付竹虎文大皿くには、竹林を背景に親子なのか2頭の虎が今にも画面から飛び出さんばかりに飛び跳ねる様が描かれていて、静寂な画面の中に2頭が浮かび上がってみえます。このようにやきものに描かれた虎は、特徴を捕らえた虎らしいものから、虎には見えないような虎まで、様々な虎がやきものに描かれています。文様の組合せとしては、竹以外には龍とともに「龍虎」として描かれることも多く、笹や松竹梅ともよく一緒に描かれています。

(川副麻理子)



染付竹虎文大皿
肥前・有田 1650~60年代